パリ開雕乾隆年間準・回兩部平定得勝圖に就て

石田幹之助

一

清の高宗乾隆帝が、その準噶爾・回疆兩部平定の功を畢つた時、勝を後昆に傳へんが爲、兩役に於ける記念すべき光景十六を選び、主として繼事を以て內廷に仕へた西人に附して之を繪かしめ、畫稾を佛京パリに送つて銅版に鏤劃し、摺刷に附せしめたものが往々にして世に傳はつてゐる。兩部剿平の史實を攷へるに方つても、版畫の沿革發達を知らんとするに際しても、並に徵すべき重要なる資料なることは云ふまでもない。然し乍らこの戰圖は極めて稀覯のものに係り、博覽なるコルディエー氏をしてなほ且つ "peu communes" と云はしめ、その "rare-tés" を嘆ぜしめてゐる。[1] 歐西に於いてもその今に存するものは恐らくは數本を出でないであらう。[2] 本邦に於ては近來間〻二三零本の所藏者を聞かないでもないが、その完本の所在に至つては寥々として未だ五指に充たない。[3] 後に述べる如く支那にはこの圖が相應に存しなければならない筈であるが、私の寡聞なる杏として殆んど聞く所がない。近く山東省歷城の圖書館にこの圖らしきもの一本を藏するとか聞き及んだが、未だそれに就いて詳しく知るの便を持たない。[4] されば東西ともにこの戰圖に就いて知られてゐる所は甚だ少い。コルディエー氏は之を慨し、在パリ佛國學士院文庫 (Bibliothèque de l'Institut) 所藏の古文書を始め、倔强なる當時の根本史料を涉獵して之が由來を究め、交ふるに氏獨特の富瞻なる見聞を以てして詳細なる一編の解說を公にした。四枚の圖版と共に「東亞襍纂」(Mémoires concernant l'Asie Orientale) 第一卷々頭を飾る論文が卽ちそれである。[5] これより先、氏は既にその「支那書史」中

39

に本圖纂に就いて述ぶる所があつたが、[6]未だ少しく說いて詳しからざるの憾があつた。この一編の出づるに及んで戰圖の由來する所、完本零本の所在、異版の有無等のこと始めて明に、その開雕終始の顚末は之に依つて多大の光明を與へらるゝに至つたのである。

然るに今春田中慶太郎君が北京より將來し最近岩崎久彌男の蒐書の中に加へられたこの戰圖の一完本は、未だ世に廣く知られてゐない一異本であつてパリ版の圖十六張に附するに各圖一張計十六張の乾隆御製題詠を以てし、なほ之に御製の序一張と內廷諸臣の跋一張とが添へられてある。御製は題詠も序文も共に行書であつて御筆と稱され、侍臣の跋は楷書であつて兩者並に木版に鐫して刷つたものである。落款の印影は特に朱色を以て印してある。裱褙は恐くは北京に於て之を施したものであらう、今色は褪せ絲は綻びてゐるが麗美なる所謂乾隆錦の類を以て裝潢を加へてある。題箋は之を見ない。この一本は乾隆御詠の題詩がある點から見ても、支那側に於てその由來や憑據の如何を詳しく傳へた跋を有する點から見ても、又その體裁が從來世に知られたものと全く異つてゐて、之を見て始めてこの圖は恐らく本來斯かる形で傳へらるべきものではなかつたかといふことを思はせる點からしても、一つの新しい材料として一應紹介を試みらるべき値があらうと考へられる。而も具にその繪と題詠とを檢し之をパリにて刊行された解說[7]の云ふ所に對比するに、共に同じ十六葉の圖版より成るに拘らず、繪の順序と云ひ、その何を描けるかの說明と云ひ、兩者甚だ相卽せざること遠いものが多い。旁〻私は之を機としてこの戰圖の由來より異版の種類などを述べて新出の一本の解題に逮び、右の解說の適否などをも一言して見度いと思ふ。

註

(1) H. Cordier, Les Conquêtes de l'Empereur de la Chine (Mémoires concernant l'Asie Orientale, Tome I, Paris, 1913, pp. 1-18, Pls. I-IV.) pp. 11, 18. この戰圖が流布少き爲、後にHelmanなるものがその覆刻を作つて公にしたが、その際この初版のフランスに殘されたるは "très-petit nombre" にして plus grande rareté" のものであるとしてゐる。(右覆刻の題言に據る。この覆刻に就いて詳しくは後段に云ふ)。

(2) コルディエー氏の傳ふる所では完本は七部しか知られてゐない樣である。これも詳しくは後に云ふ。

(3) 私の知る限りでは文學博士狩野亨吉氏の一本、京都帝國大學及び岩崎男の手に歸したモリソン文庫の藏本各一本、合せて三本しかないと思ふ。

(4) 「史學雜誌」第參拾編第六號所載田中文學博士の鮮・滿・支各地旅行復命書參照(第六六三頁下段)。

(5) 註(1)記した論文。Jean Monval 氏が既に Les Conquêtes de la Chine, une Commande de l'Empereur de Chine en France au XVIIIe Siècle. (Revue de l'Art ancien et moderne, XVIII, jouillet-décembre 1905, pp. 147-160) なる小篇を公にしてゐるが私は未だその全文を見ない。

(6) Bibliotheca Sinica, 1re Éd., Paris, 1881, Vol. I, 265-6; 2me Éd., Vol. I, Paris, 1901, 641-642. 異版に關してはなほ此書史に就いて見るを必要とすることがある。

(7) この圖は最初パリにて開雕の際、何等の解說も附せられず、番號も附けられなかつた。その之あるはヘルマンの覆刻に始る。彼は或る憑據に基いて圖版に解說を附け之に順序を附けた。この順序と解說とは世の信ずる所となつて、元來順序と解說とを缺く原版にも之を充當してその順序と解說とに充ててゐる。玆にこの圖を論じるに方り番號がなくては兎角不便であるから、この順序の當否は後に論ずるとして以下すべて假にヘルマンの附する所の番號に從つて原版の圖をも律することゝする。

一

乾隆二十年(一七五五)夏、達瓦齊(Tawaçi)の亂平ぎ、二十三年(一七五八)正月阿睦爾撒納(Amur Sana)の屍至り、準噶爾・伊犁平定の功が成つた。この年回疆にまた叛亂があつたが明年幸にその戡定を告げ、二十五年(一七六〇)春出征の王師は京師に凱旋した。後、帝はこの兩役を紀念せん爲に宮城內紫光閣に役中の功臣百名の肖像を畫かしめ別に戰中の重要なる事件十六を繪圖せしめて之を閣壁の左

右に掲げしめた。[1] それは乾隆三十一年（一七六六）丙戌に出來上つたが[2]如何なる畫家の手に成つたものか之を知る由がない。私は北京に遊んだ際遂に紫光閣に詣り親しくこれらを撫してその詳細を稽査するの機を得なかつたことを遺憾とする。帝は之と前後して[3]内廷に奉仕する宣教の西人 Giuseppe Castiglione,[4] Jean-Denis Attiret,[5] Ignace Sickelpart[6] 及び Jean Damascène[7] の四人を選び、別に戰圖十六葉の描繪を命じた。（西人の中、初の三人は耶蘇會の教士で最後の一人はアウグスチヌス派の僧侶である）。これが卽ち本稿に於て論ぜんとする銅版畫戰圖の原圖である。その成るや帝は之を歐洲に送りて鏤鐫に附せんと欲し、廣東總督に命じて之に關する諸種の Information を覓めしめた。英人の同處にある者は早くも之を聞き及んだが、同地在住の佛人 P. Lefebvre 師はその之を佛國に送るの適當なるを指摘して遂に總督をしてその議を容れしむるに至つた。彼は凡そ雕版摺印等の技は佛國を以て全歐第一となす趣を述べて勸說に努めたのである。乾隆三十年（一七六五）紫光閣の戰圖この翌年成る 乙酉五月二十六日（洋曆七月十三日）上諭あり、帝は正式に之を佛國に送り雕版に附せしむべきを命じた。此時先づ送られたのは十六枚中第 V, VII, VIII, 及び XV[8] の四枚であつて右七月十三日北京 Castiglione 發パリ "Directeur des Arts 宛の手翰と銀一萬六千兩（テール）（約十一萬二千八百リーヴル）とを添へて廣東なるフランスのインド會社（Compagnie des Indes）[9] にその遞送方を托すことゝなつた。カスチリョーネはこの手翰に於て雕刻が「正確且明快」に行く樣に望む所があつた。翌年この畫稾がパリへ着くや、印度會社の重役等は然るべき名工を得んことに努め、畫は兎も角カスチリョーネの書翰の宛名の意を酌んで同社の取締役の一人 M. de Méry d'Arcy の手を經て當時の王立畫院總裁（Directeur de l'Académie Royale de Peinture）

Marquis de Marigny の許へ送られた。これが一七六六年十二月三十一日のことである。この日フランスの宰相 Bertin は此件に就いて支那を代表してゐるらしく覺ゆる某々二支那人に書を裁し[10]、畫藁の到着を通知してゐる。この乾隆の委托に就いてはマリニイ侯專らその全般の局を宰し、侯の推擧に依つて當時王立畫院に Secrétaire-Historiographe の職を奉じ雕版界の巨擘として名聲嘖々たる Charles-Nicolas Cochin (le fils)[11] 技術上の監督に任じ、部下の鐫工に對して自ら "inspection et direction générale" を與へることを托され、四枚の畫藁に對しては先づ四人の秀拔なる腕を持つた工人の選拔を行つた。コシエンの高足 Le Bas, Saint-Aubin, B.-L. Prévost 及び Aliamet がそれである。その後一七六七年七月、畫藁の殘部十二葉パリに至るや、コシエンは更に N. de Launey, Masquelier, Née, Choffard の四名を追選して其の雕鏤に當らしめることゝなつた。

これより先、同年四月十九日、マリニイ侯はコシエンに手書を送り料金、期限等の協定を開始したが、二十二日に至つて雕工の方の返事があつた。侯は圖版毎一葉の鏤刻料一萬リーヴル、若一人の雕工專ら圖版を鐫する時はなほ加ふるに一千リーヴルの割增を以てすること、成るべくならば一七六八年歲末迄に工を了ふべきこと等を申し送つたに對し、コシエンの方からは料金の點は來示の趣にて可、但し一圖版の着手に方りて一千リートヴル、鏤劃の途に於て三千リーヴルづゝ二回、最後に完成の時更に三千リーヴルの割を以て分割支拂を請ひ度き旨を答へ、且つ期限の問題に就いては一七六九年季夏に至るまでは四枚の完成は難しからうとゝふ挨拶であつた。(事實第一回分の四枚が出來上つて刷り上つた圖が北京へ向け送られたのは一七六九年の末のことであつた)。料金のことはこの割合を以て行けば、最初佛國へ送られただけの金額では無論不足であるが、これらは年

賦を以て廣東なる公行より同地駐紮の佛國インド會社代表（後にフランス領事に變更）へ支拂はれてゐたものだと傳へられてゐる。で、この年の五月二十三日には雕工の側より致せる第一回の料金請取狀が出てゐるからこの時分から鏤刻の業に從つたものであるらしい。コシエンは實際監督の衝にあたり、原畫に多少の修正を加へたるのみならず、二三の雕版には、（特にLe Bas及びPrévostの受持のものには）、相當に手を加へてゐる。

何れにせよ支那の皇帝からの特別な註文であるからかくの如く銅版の雕刻が歐洲一流の名工の手に委ねられたばかりでなく、其他の點に就いても周到な注意が拂はれたことは云ふ迄もない。之を印刷すべき用紙は紙商Prudhommeなるものに特に命じて抄せしめたGrand Louvoisと稱するもので横三pieds四pouces半、縱二ピエー六プス半といふ大判のものであつた。（一ピエーは約三三センチメートル、一プスはその十二分の一）。印刷を擔當したものはBeauvaisといふ人で紙商のPrudhommeと共に孰れもコシエンの推薦にかゝる人物である。で、一七六九年十二月最初の四枚が完成して以來、約四年、一七七四年に至つて漸く全部の工を竣へることが出來た。雕工側の最後の金の請取證で一七七四年一月十五日附のものが殘つてゐる所を見るとこの時分には既に最後の工を終らんとしてゐたものであらう。

以上がパリに於いて出來た戰圖の由來であるが、この出來上つたものは如何なる體裁であるかといふと紙幅の大きさ横約一〇二センチメートル、縱約七〇・五センチメートル、圖面の大きさは横約九三・五センチメートル、縱約五七センチメートルで畫面の下緣にはすべてラテン語形にて左に原畫作者の姓名肩書、畫稾作成の年代、中央にコシエン、ル、プイスの監修なる旨を記し、右端には銅版雕刻者の姓名と雕鐫竣功の年を刷り出してある。外には何にも記さ

れず、何等畫面の説明らしいものは附けられてゐない。(中には畫者の名の見えないものもあり、その名あるも年代のないといふ樣なものもある。雕工の名の落ちたのは無いが年代の記してないのは往々ある。)これを假の番號順に排列して、畫稿の筆者と雕工の名と各々の出來上つた年代とを表にして見ると、

圖版	原畫作者	完成年代	署名雕刻者	竣工年代
I	J. D. Attiret	?	L. J. Masquelier	?
II	J. Damascène	?	J. Aliamet	?
III	G. Castiglione	1765	J. P. Le Bas	1771
IV	?	?	A. de St.-Aubin	1773
V	G. Castiglione	1765	J. P. Le Bas	1769
VI	J. Damascène	?	F. D. Née	1772
VII	J. Damascène	1765	A. de St.-Aubin	1770
VIII	I. Sickelpart	1765	B. L. Prévost	1769
IX	?		J. P. Le Bas	1770
X	?	?	B. L. Prévost	1774
XI	J. Damascène	?	P. P. Choffard	1772
XII	J. Damascène	?	N. de Launay	1772
XIII	J. Damascène	?	P. P. Choffard	?
XIV	J. D. Attiret	1764	J. P. Le Bas	1774
XV	J.D. Attiret	1763	J. Aliamet	?
XVI	?	?	J. P. Le Bas	1770

右の中IIIとIXとはLe Basの雕版なるが如く記されてゐるが事實は然らず。大部分Moreau le Jeuneなるものゝ手に成りLe Basは單に仕上に手を下したるに止るものであると傳くる。それはパリBibliothèque Nationale所藏のヮシヰンの作品中にかういふことを書いたものがあるのでそれが分るのだといふことである。

この一七七四年に全部完成を告げた圖版は凡そ何部印刷せられどの方面へどの位分布したかといふ事が一と通り知り度いが確なことは分らない。兎に角版がすべて完成した後十六種全部百枚づゝ摺られ、百組にせられ銅板全部[12]と共に北京へ送られたことは

確らしい。[13] 然しその前にも第一回の四枚だけは何組か送り届けられてゐるに違ひないし其後 Benoist 師に托して七枚（七種？）だけ一七七三年頃北京朝廷へ届けさせたことも間違ひないらしい。Benoist が乾隆帝に謁して之を上つた時、大いに帝の滿足を買ひ得たことを報ずる書にこれが見えてゐる。だからこれらと重複になるといふ意味に於いて最後に數多く送つた分がたとへ百組であつても一組十六枚でなかつたかも知れない。然しその邊の記載がコルディエー氏の解説では甚だ明瞭を缺く樣に思はれる。が、これは或は本來調べてもよく分らない事實なのかも知れない。また フランスにはフランスの王室及び王の文庫の爲に極めて少數の完本が幾組か遺されたと傳へられてゐるがこれは確に事實に違ひない。[14] その北京へ送られたものがその後どうなつたかは姑く後に讓つて次にフランスに殘つた諸本や後に出版された異版に就いて少しく述べて見度い。[15]

註

(1) 乾隆帝御製「紫光閣宮功臣像及諸戰圖舉集諸落成爰賦六韻仍疊四章」「紫光閣曲宴外藩並回部詩以誌事」「戰圖補詠」序等に據る。これらは「御製全集」の中に收められてゐるであらうが私は今この書を見ることが出來ない。「欽定皇輿西域圖志」卷首三天章の部に載する所に就いて私は玆に之を引くのである。（因にこの「戰圖補詠」の序に就いては後に少しく云ふ所がある）。

(2) 前記「戰圖補詠」序。

(3) パリで銅板に附せられたものに記入された各原畫の完成年代によると、一七六三年が最も古いからその時分から命を受けて筆を執つてゐたものと思はれる。

(4) Giuseppe Castiglione (Joseph Castilhoni)。イタリアの人、一七一五年八月支那に來りて西教を弘め、一七六四年北京に於いて歿した。畫伯朗世寧として名聲の高いことは玆に私の改めて云ふ迄もない。

(5) Jean-Denis Attiret (Joannes Dionisius A.) は Comté の人、一七〇二年七月三十一日 Dôle に生る。一七三八年八月五日以來支那に宣教、一七六八年十二月北京に逝く。漢名を巴德尼といふ。德尼は Denis の音譯であらう。乾隆帝の深寵を忝うし一七五四年高官を賜ふ事は Lettres Édifiantes, XXVIIIe Recueil, 1758 卷頭 p. XXXI 以下に載する所の P. L. Patouillet の手翰に見えてゐる。畫師であつた父に丹青の技の手ほどきを受け、後

Marquis de Broisin の保護の下に益々その道を勵んだ。Lyon, Rome に遊び後 Dôle に回り繪事を以て世に立つ。肖像畫はその得意とする所であつた樣である。乾隆帝圓明園離宮經營に際し、Benoist 師（蔣友仁）と共にその宮室苑池の設計に與り Rococo の趣味を加へたるは人のよく知る所である。（Lettres Édifiantes, Nouv. éd., XXII, 1781, pp. 490-528等）。なほ詳しくは Cordier, Les Conquêtes &c., pp. 3-5. を見られ度い。

(6) Ignace Sickelpart (Ignatius Sichelbarth) は Ozoch (Tchéque) 族の人、一七〇八年を以て生る。一七四五年四月以來支那に布教し、一七八〇年北京に逝く。漢名を艾啓蒙（Catalogus Patrum ac Fratrum S. J., 1892 に據る）又は艾納爵（Ditto, 1873 に據る）と稱した。艾納爵は勿論 Ignace 若しくは Ignatius の對音である。一七七七年（乾隆四十二年）九月二十一日、乾隆帝七十の賀に際し Castiglione と同樣の殊遇を賜はる。事は Mémoires concernant l'Histoire...des Chinois : Par les Missionaires de Pekin. Tome VIII, Paris, 1776, p. 283 及び此年十一月二十二日附 Panzi の書翰に詳しい。Panzi の手翰は C.-G. de Murr, Journal zur Kunstgeschichte, IXter Theil, 1780, s. 93 にも掲出せられてゐる。（Cordier, Les Conquêtes &c., p. 5.）

(7) Jean Damascène (Joannes Damascenus) 一七八一年北京に逝く。一七七八年九月二十日北京司教に任ぜられたる人は同名異人である。

(8) 圖版の順序に就いては前節の註(7)を參照。

(9) フランスのインド會社はその東インド會社の後身である。一七六九年、王命により特權を廢止さる。法學博士田中萃一郎氏の著「東方近世史」上卷一三四—一三八頁に簡明なる記述がある。

(10) Ko 及び Yang とあり、如何なる字を充つべきやを知らない。

(11) 一七一五年二月二十二日パリに生れ、一七九〇年四月二十九日 Louvre に逝く。

(12) 其の中一枚は轉々して羅振玉氏の手を經て今京都帝國大學の有になつてゐる。

(13) エルマシの覆刻題言に據ると簡單に「百部刷られ支那に送らる」と書いてあるが少しく事實を盡さない樣に思はれる。

(14) エルマン覆刻題言。

(15) この節に於いて一々斷りを附けない處はすべてコルディエー氏の解說に據つたものである。文書の出所や工人の生死年月日等は原文の脚註に詳しいから、細い點を見られ度い時は直接氏の所述に就いて檢討せられんことを望む。

三

この圖の歐洲に遺留したものは屢〻述べた如く少い。殘るべからざる性質のもの故その然るのは敢て

怪しむを須ゐない。コルディエー氏の傳ふる所に據ると佛京パリの Bibliothèque Nationale 版畫部に藏せらるゝ所の完本は、フランスの國章を以て飾られ「ジョトル大帝征戰偉績」四圖と共に製本せられた壯麗なるものであるといふ。又同部に於いて Le Bas その他雕工各自の製作に就いて索めるとこの十六枚中その人の雕つたものだけが各々その所に收めてあるといふ。Choffard の作なる第 XIII 圖も Cochin の作の中へ混入して存してゐることも氏の記述によつて知られる。然しこれらは零本に過ぎぬ。他の完本に至つてはなほ氏によつてその存在を敎へらるゝ Brunet が擧ぐる所の三部、前記雕刻師の一人サン・トーベン舊藏の二部、Château de Coppet に藏せらるゝルイ十六世より Necker に贈られた額にしてある一部等のあることを知るに止る。[1]

かくの如く單なる戰圖としても興味深きこの版畫が、かくの如く出版地なるフランスにさへ稀有であることは、遂にその覆刻の發刊を見る次第となつた。而もそれが單なる複製に非ずして一二の問題を遺すが如き覆刻本である爲に特にこゝに注意しておき度いと考へる。コシエン監修の乾隆の勅版が全部完成してから約十年目の一七八三年から一七八五年へかけ Le Bas の高足にして Duc de Chartres の御抱雕版師たる Isidore-Stanislas Helman が勅版に就いて畫面を約四分の一に縮刻したものが卽ちそれである。圖は八三年から既に出來てゐたのもあつたが始めて之を刊行した時は一七八五年であつて圖版四枚づゝの小冊子四冊に分割して發行したものであつた。[2](正確な大きさを述べると横五五センチメートル、縱四一センチメートルになる)。版畫はかなり精巧なものであるが原勅板に比べる大分省略に從つた所もあり(例へば第I圖左方廻廊のディテイルなど)濃淡の調子も少し强きに過ぐる樣で技術上の價値は相應に落ちる樣に思はれる。この覆刻本の特色

と云ふべきは出版者エルマンが或る種の憑據に据り、之を確實なものとして圖版の順序を揃へ、各圖毎に畫面の下部に簡單なる解說を加へ、且つそれらの解說を別に一枚の表に纏め之を一種のFrontispiece として卷頭に置き、その上欄に題言を設け簡約にこの原勅版戰圖の由來を述べ、また下方に自家再刻の理由を記したことなどであらう。この圖纂に未だ表題もなかつたのを、兎も角も "Suite des Seize Estampes représentant les Conquêtes de l'Empereur de la Chine, avec leur Explication" と稱したことも、この刻本の特異の點として數へてもよからうと思ふ。このエルマンの複刻に際して選まれた說明の文が何に基いて作られたか、その排列の順序が果して正しいものかどうかは別に述べるとして、爾後西人は專らこの解說と次第とを信憑し、無順序、無說明の原勅版の戰圖を取扱ふに於いても同じくこの複刻の順番と說明とを流用し、原形のまゝの不便な點を補つてゐる樣に見受けられる。上來屢〻引用したコルディエー氏の解題に挿まれた圖版II・IVに據つて窺はるゝもとフランスのBibliothèque Royale 所藏本の如き、京都帝國大學藏本の如き、またDr. G. E. Morrison 蒐書中のものゝ如き、みなこの例と認むべきものであつて、複刻のFrontispiece中題言の下部に殆んど全紙面を縱四行橫四段に仕切つて（各區劃縱六サンチメートル、橫一〇サンチメートル[3]）記してある說明表を十六片に切り離し、之を順序通りに各圖版の下部へ右方へ寄せて貼り附けて原圖の解說に充てゝゐる。（この順序や說明は獨り原版の取扱に際し應用せられたばかりでなく、更に後出の別版などにさへ利用せられてゐる。そのことは直ぐ後に述べる）。

序に述べておくが、この再刻本には更に附錄として八葉の銅版畫を添へたものがある。それは特にコルディエー氏などの注意しない所であるが、覆

刻の圖版十六枚が完成した時に之に添へて印刷されたと覺しいかの說明を表にした題標紙(フロンティスピース)には、附錄としてなほこれ〳〵の圖を補ふといふことがそのその下方に記されてあり、現に私の見たモリスン蒐書中の一本には正しくこの補圖八葉が添へられてゐる。その圖樣は右の題標紙の記載に詳かであるが[4]要するに當時前記 Bertin 氏の許に贈られてあつた二種の支那畫の複製であつて支那皇帝の鹵簿其他を寫したものである。この補圖は前の十六葉の戰圖の續きとして引續いて XVII 乃至 XXV の番號を打つてある。早いものは一七八六年、遲いものは一七八八年に刻が成つてゐる樣であるからその揃つて出版せられたものは早くも一七八八年のことゝ思はれる。(唯詳しいのは右に述べた記載中、二種の繪を四圖に開雕するとあつて實は八葉あることである。如何かなる事情で初の宣言と實際とがかく異つて來たか、この點は私のまだ知り得ない所である。因に、モリスン蒐書中の本書は同じくエルマンの刻した銅版畫集たる Text をも含むけれども Abrégé Historique des Principaux Traits de la Vie de Confucius……及び Faits Mémorables des Empereurs de la Chine……と合卷のものである。この再刻本は多くかゝる合卷の形式で世に出でたものであるか、但しはこの一本が特殊の例であるか、これも亦私の未だ明かにしない所である。コルディエー氏はその邊に就いては何も述べてゐない)。

次に擧ぐべき異本はコルディエー氏の「支那書史」に Batailles de la Chine, réduites d'après les grandes planches que l' Empereur Kien-Long a fait graver. A Paris, chez Hocquart, 1788, 24 grandes pl. ou fig., in-fol., oblong.[5] と記してゐるものである。これは私の未だ實物を見ることを得ないものであるから如何なるものであるかを述べることが出來ないが(コ氏も亦何等言及するところがな

い）[6] 刊行の年が一七八八年であること、圖版の數が二十四枚あること等より察するに、恐らくは前記エルマンの覆刻を（その附錄共二十四枚あるものを）更にどうかしたものではあるまいか、姑く臆測を述べておくに止める。なほ一つ擧ぐべきは原勅版を寫眞石版にした複製である。この Edition に就いてはコルディエー氏より何等聞く所がないが、私はモリスン蒐書中の一本に就いてかゝる別版の後に作られたことを知つた。これは何人により何處で版に成つたものか殆んど知る由がないが（その書に序文も例言も何もないから）、唯その間に挾んであつた紙片に記した英文の覺書樣のものに據ると（これはその字から判ずると歐米人の手ではないらしく、又文章が極めて幼稚な所から察しても多分支那人の手記に成るものだらうと思はれるが）この圖纂は「もと光緒庚寅の年の夏佛國バリに於いて雕版せられたるものであるが、後、獨人Sliaweiti とかいふものが新法により之を寫眞に撮つて縮圖し、更に石版に附したものである」[7]といふ樣な意味が書かれてゐる。光緒庚寅は恐らくは乾隆庚寅(1770)の年の誤ではなからうか、その時分は丁度原勅版の雕鏤に附せられつゝつあた時であるから。然し發行地やその年月等は全く分らない。單なる臆測であるが光緒庚寅(1890)は或はこの複製の發行の年であるのを誤つて原版製作の時代に混合したのではないだらうか。要するに本書は仔細に點檢するとコシエンの監督になる大形原圖より直接に縮寫をして版に附したものであつて覆刻本の縮寫でないことは現本を對比して知ることが出來る（勿論右の紙片に記してある通り寫眞に依る縮刷であつてエルマンのものゝ樣な模刻ではない）横綴ぢ（左）全一冊十六葉（一昨年水害を蒙りたる後は一枚づゝにして Mappe に入れてある）縱約四五・五センチメートル、横約六二センチメートル、畫面の大きさ縱約二五・五センチメートル、横約四五センチメートル、順序はエルマンの覆刻の分に倣つて

これと同様の番號を打ち、解説亦之を追ひ、畫幅の下方右隅に縦七センチメートル、横十二センチメートルの長方形輪廓を黑く印刷した白紙を貼り、その中に青黑色インクを以てペンでエルマン本の格子形の中の解説をその儘に寫してある。私の寡聞なる、この手の本の他に何處にかあるか否かを知らない、偏に博雅の垂教を待つ次第である。(前記の紙片に「共に三十八葉」と丁度圖數を二倍に書いてあるのは何の誤であらうか)。

この戰圖の西洋で出來た異本は私の知る範圍では大凡右の如きものである。エルマンは名工ではあるが原版に比べる時はその複刻本の技の稍〻劣つてゐることは既に定評がある樣である。Hocquart 出版のものは現本を見るに及ばないから何れとも批評の限りでない。最後のものは寫眞版であるから寫眞版としての技の巧拙を判ずるより道がない、この點に於いては之を實物に徴して決じて優れた技を示したものでないことは何人も異說のない所と思ふ。

然らばかの全部完成と共に支那へ送り届けられた勅版の大形原版の戰圖は一體どうなつたであらうか、次に少しくその方へ筆を向けて見度い。

註

(1) 前掲 H. Cordier, Les Conquêtes &c.,pp. 11, 12, 16.

(2) H. Cordier, Bibliotheca Sinica, 1re Éd., Vol. I, 265-6; 2me Éd., Vol. I, 641;——, Les Conquêtes &c., p. 18.

(3) H. Cordier, Les Conquêtes &c., p. 13 にコ氏は縦九センチメートルと記してゐるが九は六の誤であらう。

(4) ここに參考の爲全文を掲出する。

SUPPLEMENT de deux Tableaux, formant quatre Estampes. Pour completter cette Suite d' evénemens du règne de l' Empereur Kien-Long, on a profité de la communication qu'a bien voulut accorder Mr. Bertin Ministre d' Etat, 1°. d'un Tableau unique faisant partie des précieuses raretés de la Chine qu'il possede, ce Tableau d'après nature, peint a Gouache rehaussée d' Or, par un peintre de l' Empereur de la Chine, represente l' entrée de ce Monarque dans Pékin sa ville Capitalé avec l' appareil usite en cette occasion, il porte 10 pieds et 1/2 de long sur 2 pieds et 1/2 de haut, il sera reduit et gravé en trois Planches qui se raccorderont et pourront se coller ensemble pour ne composer qu'un seul Sujet, 2° l' autre Tableau réduit en

une seule Estampe, sera la Représentation de l' Ouverture du Labourage, Cérémonie que fait tous les Ans l' Empereur de la Chine et ou il conduit lui même la Charrue. Cette Suitte sera de 12ᴹ ainsi que chacune des Livraisons précédente, et se delivrera à la fin de l' Année 1785.

Paris chez l' Auteur, De l' Académie des Arts de Lille Flandre, Rue St. Honoré vis-à-vis l'Hotel de Novailles N°. 315 chez Mr. Ponce, Graveur de Mgr. Comte d' Artois, Rue Ste. Hyacinthe, Maison de Mr. Debure a coté du Foureur.

(7) Bibliotheca Sinica, 2ᵐᵉ Ed., Vol I. 642.

(6) 右の書並に Les Conquêtes &c.

(5) 原文の通り鈔出するゝ The Ta-Ching Empire's Imperial War Atlas of the Tranquilisation (or Pacification) of Hsin-Kiang. This map was originally engraved at Paris, France in the month of the Year of Keng-Yin of Kwang-Hsü, Shaweiti(?) the German reprinted it by a new plan (by photographing it into small pictures and mounted on the stone) and bound it up in one volume [of として之を消し] with 38 sheets..... 文勢から察するに何か漢文の手記様のものを譯したらしく思はれる。

四

パリに於いて開雕せられた勅版の戰圖が、支那へ送られてから後どうなつたかといふことに就いては吾等は今迄杳として消息を聞かなかつた。勿論佛國に遺された幾部かは圖こそ同じであるが順序もなく解說も公にはせられず、ほんの記念として殘してあいた見本ともいふべきものであつて、その順序あり、解說あり、序跋ある完全なものは註文主たる乾隆帝の宮廷に於いて作られたに違ひないとは豫て吾等の推測してゐた所であるが、今回田中君將來のものを見るに至る迄は未だその詳しいことを知ることが出來なかつた。一體西洋側の文書、記錄にはこの勅版開雕に就いてはいろ〳〵とその事實を記したものが多いが支那側の史籍には何等そのことが傳はつてゐない。西洋側の史料で年月日の明瞭に記されたものをとつて、之を支那側の史料のその相照應する時日の條に對比しても後者に於いては何等これに關する記事を發見しない。乾隆帝の開版下命のこと、その出來上つた時のこと等に就いてさへ何にも記した所を見ない。尤も私の調べたのは支那の史料と

云つても詳しい點に於いて「東華續錄」乾隆の部以上には出でない。（これよりもつと簡略な書には勿論ない）。然し內藤博士の垂示によれば恐らくこの種のことは實錄を見ることが出來てもその中に之れを發見することは困難であらうとのことである。（實錄と雖も一種の編纂物であり、記載すべき事實の選擇が行はれてゐる以上、支那人にはこの種の外國關係のことが得て輕視せられ易いからである）。けれども（今この現本を見て思ひ合せるのであるが）この支那で完成された完全なるものは實は既に英人 Sir J. Bowring が一八五〇年頃、寧波なる范氏の墨莊に就いて之れを見、その始末が簡單乍ら Dr. Macgowan に依つて一八五九年の王立亞細亞協會北支那支部の學報に掲載せられてゐる。[1] が、その文は餘りに簡略であつて折角その消息を知らんと欲すること切なるこの支那出來の完本の詳細に就いて殆ど語る所がない。唯圖の一隅に記された當時辛うじて讀み得たといふ銘記によるとこれらの戰圖は「ルイ十六世より乾隆帝に贈れるものであつて一七五六年に於ける Kalmuk 征討の役を圖說するために」開雕せられたものである旨が述べてあるだけである。（「贈りたるもの」云々はその實際の由來より見て少しく穩かでないが、Macgowan 氏もこの戰圖に就いて深い知識があつた譯でもなからうから或は何か自分の考へで誤解したのかも知れない）。尤も嘉慶年間に阮元の刊した范氏の藏書目錄「天一閣書目」にも、既にその卷頭「御賜圖」の項に乾隆四十四年（一七七九年）御賜に係る「平定回部得勝圖、共十六幅一分」を擧げ各圖の圖題と跋文の全文とを掲げ右の戰國のことを說いてゐるがその記述餘りに疎にして今現本を見てこそこの「書目」所載のものがバリ開雕の戰圖であると知られるが、然らざるに於いては果してその然るや否やを決し難い程である。（Paul Pelliot 氏は誤つてかの Bowring 氏の見たといふ范氏の藏本を

以てパリ版の戰圖に非ずとし、他の戰役の光景を表はしたるものであると云つてゐる。[2] ペイオ氏の烱眼を以てして何が故にかゝる誤を來たしたかと云ふに、一つは范氏の藏本を實見しなかつたこと、一つは右の「天一閣書目」の記事が簡單な爲に「ペイオ氏は無論この書に據つたのであらうから」その戰圖の圖題だけを從來行はれてゐる佛文の解說に對照して見だけでは兩者互に吻合しないでいかにも異つたものゝ樣に思はれたことなどであらうと思はれる。[3] 書目の記載がもう少し詳しかつたならペイオ氏もさう容易に推斷を下さなかつたらうし、少くも机上の研究だけで簡單に意見を述べなかつたらうと考へる。この點に於いても同書の記事の簡に過ぐる憾みが感じられる)。(佛文の解說が同一の繪を說明し乍ら支那で附せられた圖題と吻合しないことは後に云ふ。記述の混雜を避ける爲もう少し留保して置き度い)。

この支那で仕立てられた戰圖の體裁は(それを岩崎本に就いて云へば)本稿の初めに大體述べた通りであるがその形態から考へ(又「天一閣書目」の記事などからも考へ)乾隆帝が諸親王を始め諸大官諸將士其他特別の功勞ある者に下賜せられたものと思はれる。裱褙の際の都合でもあらうか、銅版畫の四周が多少切斷せられて大きさがパリに遺された版畫だけのものに比して少しく小さくなつてゐる(縱約五五・五センチメートル、橫約九四センチメートル、厚さ約七・五センチメートル)。右へ右へと繰つて行く折本であつて左方に圖があり右方にそれと相對してその圖の光景を詠んだ御製の詩が錄してある(木版にして)。圖、題詠各十六張、最後に右に御製御筆(をやはり木版にした)序、左にそれと向ひあつて傳恆以下數人の諸臣一同で撰んだ跋(楷書、筆者は分らない。同じく木版)各一張がある。この序文は元來卷首へ置かるべきのを裝幀を施す時に何等かの誤で所を失したものであらう。右の跋文によれば「親製序文冠於冊首」とあり、范氏の藏本の

如きは「天一閣書目」を通じて窺ふに正しくその序を卷頭に有してゐる。岩崎本に裱褙し際に多少の誤のあつたことは二三の戰圖（並にそれに對する題詠が圖と共に）少しく順序を違へてゐるについても證據立てられる。これは(一)常識的に云つてもこれらの圖が戰役經過の順に、大體その Chronological order を以て排列さるべきか當然でもあるし、事實上(二)范氏の藏本などは正しくかゝる順序に列べられてあるし(三)正しく裝幀せられた諸本（又はそのいづれかの一本）もしくは（次に云ふ）紫光閣に陳べてあるこの戰圖と同數同題目の別の戰圖に題された同じ詩に據つたと思はれる「回彊通志」[4]卷頭所載の御製詩〔戰圖の題詠を網羅せるもの〕が同じく正しい時日順に排列されてゐるし、旁〻圖の順は范氏本の圖目、「回彊通志」の詩の順を以て正しいと認めなければならぬ。以下この正しい順序に繰り代へたことにして筆を進める。（岩崎本は裝幀の損傷多く、畫面の缺れも少くないからやがて改裝を施さなければならぬ。故に不日この正しい順に復さしめる事が出來ようと思ふ。）。此戰圖の由來やその出來上つて支那へ送られてから後の模樣などは（外國に鏤劃摺刷のことを托したに就いては一言も云はないが）上に述べた跋文に依つて始めてよく知ることが出來る。之に據ると準・回兩部平定を告げた際、之を記念する爲に幾種となく詩が作られ文が作られて石に勒せられたが、別に百人の功臣の肖像を描かしめて紫光閣に掲げ、その閣壁の左右には更に兩役中の重なる光景を描いた畫を掲げしめ、同じくこの役を永く記憶せしむる類の企てが行はれた。が、（なほその上に作られた）この冊は「復因事綴圖、或採之奏牘所陳、或徵諸諮詢所述」したもので戰鬪其他の光景を如實に寫し出し、「我將士劘壘斫陣、霆奮席卷之勢、與夫賊衆披靡潰竄驟奔鹿駭之狀、靡不摹寫」きものであると云ひ、「幀端各系以御製詩」し、その詩は事の當時「成於奏凱、錄功卽事紀實者」が十種、後に「追叙時地、補圖補詠者」が

六種であると云ひ、「裝潢成冊、親製序文、冠於冊首、並命臣等恭識其後」さしめたのがこの跋であるといふのである。その全文は「天一閣書目」にも出てゐるが參考の爲後に掲げておく。文中王者に對する諛言に近ひ誇張の言もないではないが、圖がよく事の實況を活寫してゐるのを說いた點は必しも支那人(又はその文化を繼承したものゝ)傳統的な空言とのみ思ふことは出來ない。今日の吾等の觀賞眼から見てさ程に「感興」こそ惹かないが、之を知識の上から判斷してそれらが版畫として當時に於けるかなり優れた作であることは多く異論のない所であらう。殊にかゝる寫實的な描法に緣の遠かつた支那人には一層傑出したものゝ樣に思はれたのであらう。

御筆の序文は別に示す通りであるが、戰役の記念にこれらの圖を描かしめそれらの光景に就き「已有成詠者卽書之幀間、其未經點筆者玆特補詠凡六事」とあり、跋に裝成に及び上親しく序文を製する旨もあり、之を率爾に讀まんものは特にこの銅版戰圖の完成に際して作られたものゝ如く解するかも知れない。然し、これは仔細に見る時は紫光閣に諸功臣の肖像を描かすと共に戰圖を畫かして壁間に掲げしめた時に作つた文であつて、それをこれに流用したものに過ぎない。第一この文の冒頭に「西師定功於已卯、越七年、丙戌戰圖始成」とあり丙戌は乾隆三十一年(一七六六)であるからまだこの戰圖の原畫の一部が漸くフランスへ着いたか着かないか位の時で、この年に「戰圖始成」とは云へない。實際全部がパリで完成したのは一七七四年で、その支那に屆いたのはそれより後であることは前に述べた。然らば原畫が完成した時にでも豫めかゝる文を作つたのかと云へばさうでもない。原畫は前年(乙酉の年卽ち一七六五年)に出來上つて一部は既にフランスへ向け發送されてしまつてゐるからである。要するにこれは丙戌の年に紫光閣の戰圖が完成した時に(これは肉筆の畫であら

うから、パリで版に附すべきものゝ原畫の完成と殆ど前後してその竣功を見たのは當然のことゝ思はれる。題詩の補詠を斷る爲に作つたものと思はれる。現にこの文は「欽定皇輿西域圖志」などにも收められて、[5]「戰圖補詠」六首の總序として載せてある。決してパリ開雕の銅版戰圖帖の序文とはしてない。だから跋文の中にこれが如何にもこの帖の出來た時に賜はつた序文の如く書いてゐるのは傅恆以下數人の立派な人々が署名してゐるものとしては甚だその意を得ない。(然し支那にあつてはかういふ流用を平氣でやつてゐることは珍らしくない。現にこの圖幅中の第十四、第十六兩圖を後にそのまゝ模刻して「大きさは少し縮つてゐるが」兩金川平定の戰圖の一部とし、之をその役の方の似通つた場面に流用し、なほ甚だしいことには乾隆帝が平然として之にその方の詩を題してゐる。第十四は回部献俘の圖であるが之を一方では金川平定の際俘を受くるの圖であるとし、第十六は紫光閣に回部より凱旋の將士を宴するの圖であるが模刻では之は金川平定の將士を宴する所であるとしてある。また第十五圖は回部征討の將士を天子親しく郊勞するの圖であるが少しその圖樣を代へ且之を裏返しにして景物の配置を左右にし、同じく金川の亂定るの際將軍阿桂等を郊勞するの圖だと稱してゐる。[6]恐らくこれらは一種支那流の癖なのであらう、故意のことゝしては餘りに考へが足りないからである。(こゝに述べた第十四、十五、十六三圖の圖題に就いては乾隆帝の題詠に從ひ姑く佛文の解說に據らない。理由は後に云ふ)。

さてこの十六葉の戰圖が各〻何れの光景を表はしてゐるものであるか、これからその解說たる御製題詠の全文を揭げて之を說明し、並せてエルマンの覆刻に見えて以來、西洋に行はれてゐる佛文の解說との比較を試みて見度い。が、それに先つて玆に必要なだけの範圍を限つて準・回兩部平定の顚末を略叙しておき度いと思ふ。[7]

註

(1) D. J. Macgowan, M. D., Chinese Bibliography (Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society, No. II, May 1859, pp. 170–5) p. 173.

(2) H. Cordier, Les Conquêtes &c., p. 18.

(3) 外の戰役の圖であらうといふのは、このパリ版の版畫に倣つて後に支那で兩金川の役、狆苗討平の役、臺灣戡定の役等の戰圖を銅版に起したことがあるし、現に右の書目には乾隆五十二年（一七八七）御賜の「平定兩金川戰圖、共十二幅一分」を竝べ揭げてあることなどにも據つたかと思はれる。但しルイ十六世より云々の銘記があるといふことを ignore してゐるのはどういふものであらうか。（兩金川戰圖十二幅とあるのは端本であらうか、全部で十六幅ある筈である。〔「盛京典制備考」卷二參照。北米ヲシントンなる Library of Congress 所藏のものも亦十六幅ある〕。二が六の誤でないことは現に圖目が十二しか擧げてないので分かる）。

(4) 「回疆通志」十二卷、淸の嘉慶年間總理回疆事務參贊大臣和寧の撰、同九年（1804）の自序がある。內容の一般や編纂の資料に就いては例言並に目錄に詳しい。世に未だ刊本を見ない。私の見たのは東京帝國大學に藏する支那人の手寫に成ると覺しき鈔本である。

(5) 卷首三〻（因に以下記す御製にして「圖志」に收められたものは大抵また綿忻等撰「欽定新疆識略」の首卷にも見えてゐる）。

(6) これらの支那製摸刻は慶應義塾大學圖書館所藏のものに據る。

(7) 主として「聖武記」卷四に據り、「東華續錄」乾隆十九乃至二十五年の部、「西域圖志」等を參照す。

五

十七世紀の末、Kaldan（噶爾丹）の殘落と共に Zungar（準噶爾）部は一時多少の勢を失したが後彼の一族はみなその回復を圖り依然として西陲に覇を稱してゐた。康熙帝は更に之を討たんとして果さゞるに崩じ、雍正帝亦少しく兵を加へる所があつたが未だ全く之を平ぐることが出來なかつた。乾隆帝の世に及んで汗位繼承の問題に關して準噶爾に內訌があり、部內が大に亂れるに至つた。前部酋の孫 Tawaci（達瓦齊）はその黨 Amur Sana[1]（阿睦爾撒納）に輔けられて汗位に上つたが Amur Sana に野心があり、擁立の功を以て自ら準部に王たらんとし、遂に Tawaci を追はんとした。が、事敗れて Pančur（班珠爾）Nemeku（納默庫）の二台吉と共に東走し、

（乾隆十九年秋）翌二十年（一七五五）二月、乾隆帝に熱河に謁し內附を乞ひ、備に伊犁地方取るべきの狀を上言した。準部の驍將の Mälmud（瑪木特）も亦形勢を按じて來つて淸に投じた。「于是準部爪牙心腹盡至、且指畫準部形勢如在目睫」と聖武記の著者はこの時の樣子を語つてゐる。淸はこの亂に乘じて準部を蕩平せんとし、班第を定北將軍に任じ、Amur Sana を副とし、永常を定西將軍となし薩賴爾（もと準部の大官）をその副となし、Uriyasutai, Barkul（巴爾庫勒、一に巴里坤といふ）兩路よりして伊犁地方に入らしめた。準噶爾の各部みな風を望んで軍を迎え酮酪羊馬を献じて之を犒つた。五月一日北、西兩路の軍は豫め約せる如く Borotala（博羅塔拉）河に會し進んで Tawači を覓めた。Tawači は Ili 市の西北百八十里なる Keteng Ola（格登鄂拉）に據つて之に抗したが、淸軍は降將 Ayuši（阿玉錫）をして夜その營を襲はしめ大いに之を敗つた。Tawači 身を以て逃れ泳嶺（Musur Tagh）を越えて天山南路に走つたが、Us（烏什）の Akim Beg（阿奇木伯克）Khočisu（霍吉斯）なるもの豫め淸將の檄を得て之を捕へ以て軍に献じたので準部の亂が掃平の功を告げた。その論功行賞に際して Amur Sana は雙親王に封ぜられたが彼はなほ異圖を抱き、再び準部に據り Oirat 四部に王と稱し西邊に覇を唱へんとする心あり、八月十九日入覲の途より逸して自立しなほ伊犁方面にありし淸兵の歸路を扼した。班第等は之と戰つて遂に戰死するに至つたので、淸廷では改めて Čering（策零）や Taltanga（達爾黨阿）等を遣はして之を討つたが容易に功を奏しない。二十一年（一七五六）の冬伊犁に在つた兆惠等が Čirkulang（齊爾噶朗）河より兵を移し、轉戰南して Oluijalatu（鄂壘札拉圖）に出で、こゝに敵を敗るに及び賊勢漸く衰へ、二十二年（一七五七）Amur Sana は遂に Kazak に走つたが Kazak は彼を捕へて淸

に致さんとしたので更にシベリアなる露人の許に遁れた。時に準部には痘疫が流行してゐたが彼もそれに罹つたためその冬遂に異郷に客死する悲運に會した。二十三年（一七五八）正月、露人は Amur Sana の屍を Kiakhta に移し之を清に献じた。この年の春兆惠はなほ殘れる準部の反抗者討伐に從ひ、Kulungkui（庫隴癸）山、Kholokhosu（和落霍澌）等に轉戰して勇名を輝かした。

かくの如くして乾隆朝に於ける再度の準部の亂も漸く鎮定に歸したが、之に續いて今の天山南路、（東トルキスタン、當時西人の所謂小ブハリア〔Petite Boukharie〕、支那人の云ふ回部・回疆）の地に亂が起つた。即ち回首 Burhan ed-Din（博羅尼都）その弟 Khočičan（霍集占）（これを大小兩 Khojam〔和卓木〕といふ）の二人が兆惠等の招撫に反き叛を圖つたことである。初め霍集占自立して Bâtur Khan と稱し檄を各城に傳ふるや之に應ずるもの甚だ多く、魏源に據れば「回戶數十萬皆靡」とある。たゞ Kučа（庫車）Bai（拜）Aksu（阿克蘇）三城を管する Akim Beg の Odoi（鄂對）のみ之に黨せず、伊犂へ走つて援を清に乞うた。これが二十三年春夏の候で清の回部討伐はこの時から始る。五月、清は兆惠がなほ Oirät の餘衆を討つてゐる時のことゝて雅爾哈善をして改めて回部征討の主將となし、鄂對等と共に先づ庫車を攻めたが清軍に手落ち多くして八月まで遂に之を拔くことが出來なかつた。（之より先回首兄弟は來つて城中にあつたが六月の末清兵の目を掠めて逸出してしまつた）。雅爾哈善は誅せられて兆惠之に代り伊犂より南して師を回部に移した時に回首兄弟は西に遁れ、Aksu に入らんとして拒まれ、Uš に入らんとして又拒まれ、終に兄は Kašgar に據り弟は Yarkand に籠つて清軍を邀へた。（Aksu や Uš は已に清に降つてゐたのである）。兆惠は副將富德を Aksu に駐め自ら前鋒を率ゐて Yarkand に

至り（十月）、城東の大河 Kara Usu（黒水の義 Yarkand Daria のことである）を隔てゝ對陣し、機の至るのを待つた。城中の敵却つてこの黒水々畔の營を圍み、兆惠等を封鎖すること三ヶ月に及んだ。富德は急を聞いて援に赴き二十四年（一七五九）正月 Khurama（n）（呼拉瑪、呼爾璊）にて敵を敗り黒水營に近いたが賊衆多くして進む能はず、偶〻更に別軍の來り援くるに會ひ漸く黒水の圍を解くことが出來た。（この Yarkand 城外の戰に於いて Tunggusulik（通古思魯克）の戰鬪が最も記念すべき著しいものと思はれる）。六月、大軍が Aksu に集ると共に、一時そこに還つてゐた清の全軍は二部に分れ、兆惠は Us から Kašgar に向ひ、富德は Khotan から Yarkand に向ひ、改めて攻圍の途に上つた。回首兄弟はその勢に恐れて共に城を棄てゝ逸走し葱嶺を越えて西方に逃れんとした。清兵の前鋒を率ゐる明瑞は之を追うて葱嶺の上なる Khosukluk（霍斯庫魯克）嶺に戰ひ、越えて七月七日更に之を Arčur（阿爾楚爾）山に敗り、また三日にして Badakhšan（巴達克山）の界上なる Isikul nor（伊西洱庫爾淖爾）に至り回衆約一萬二千を降した。兩回首は妻子舊僕等數百と共に Badakhšan に走つたが、その酋長は却つて之を捕へ、清將の命によりてその首級を献じた。（尤も兄の屍は盜み去つたものがあつて二十八年に至つて之を献じたのでこの時は弟の首を上つたに止る）。こゝに於いて回部の亂平ぎ、八月捷報北京に到り、二十五年二月王師京師へ凱旋するに及び、その二十七日、帝は出でゝ親しく之を城南良鄉縣の南三里に迎へ、壇を築き纛を設け郊勞の儀を行ふ。帝、天を拜し畢つて黄幄に御し將軍等は舊制に依りて膝を抱いて跪いて帝に見える。なほ翌日帝は更に將士を圓明園に犒ひ、同列にて行啓の皇太后に謁するを許されたといふことである。[2]

註

(1) 本節に記す西域の人名地名の發音は出來るだけ「欽定西域同文志」のそれに從ふ。この書は兩役の後この地方の地名・人名の正しい發音を示し、その意義を註したもので音は漢字（二種）滿洲字、蒙古字、カルムツク字、西藏字、トルコ字を以て記されてある。

(2) このことは支那側の材料に見えず、Père de Mailla の Histoire Générale de la Chine, Tome XI, Paris, 1780, p. 580. に見える。また Budakhšan の Kan, Sultan Šah の內附に就いては乾隆帝が大いに之を嘉し、幾度か之に上諭を發してゐる。これは「東華續錄」などにも載つてゐるが A. Vissière, Études Sino-Mahométans, Paris, 1911, pp. 136-144 に Trois lettres de l'empereur Kien-long au Khan du Badakchan としてその中の三通だけの譯註がある。

六

さてこの戰圖が右の戰役の何れの場面を描いたものであるかといふに、跋にもある通り「始於伊犁受降、訖於回部獻俘」る間の事件を採つたものであつて清兵が Tawaci を覓めて伊犁に入る所から起つてゐる。之を御製詩の題を圖題として表にして見ると、

一　平定伊犁受降
二　格登鄂拉斫營
三　鄂壘札拉圖之戰
四　和落霍澌之捷
五　庫隴癸之戰
六　烏什酋長獻城降
七　黑水圍鮮
八　呼爾滿大捷
九　通古思魯克之戰
一〇　霍斯庫魯克之戰
一一　阿爾楚爾之戰
一二　伊西洱庫爾淖爾之戰
一三　巴達山汗納款
一四　平定回部獻俘
一五　郊勞回部成功諸將士
一六　凱宴成功諸將士

卽ち六及びそれ以下が回部平定の役に關するものでそれより前が兩度の準部用兵に係るものである。これらの題の下に詠まれ、各圖の解說となつてゐる御製詩は戰圖を見るに於いて大いに參考となるものであるから、その序跋と共に原形の儘に組んでその全文を揭出することゝする。割註も亦もとより存するものである。（但し「回疆通志」はこれらの詩全部の本文と註と作られた年月とを錄してゐる。又右の中三、五、九、一〇、一一、一二の六圖は同じ題で各々の序と共に「西域圖志」卷首三に收めてあるし、一は御製西師底定伊犂捷音至詩以述事として「圖志」の卷十二に、二は阿玉錫歌としてその卷二十二に、四は和落霍澌行として卷十に、六は烏什城酋長霍集斯伯克擕回衆獻城降詩以紀事として卷十七に、七は圍解八韻として卷十八に、八は無題にて卷十八呼拉瑪の條下に、一三は副將軍富德奏報拔達克山汗素爾坦沙獻逆賊霍集占首級並以全部納款稱臣信至詩以誌事として卷四十六に、一四は御午門受俘馘として卷首三に、一五は二月廿七日郊勞出征軍兆惠富德及諸軍士禮成紀事として卷首三に、一六は上巳は凱宴成功諸將士として序と共に同じく卷首三に何れも全文分註並に錄してある。跋文は「天一閣書目」に載せてある。

【こゝに齟齬を生じたから四〇四頁下段註(10)の補遺をしておく。Ko というのは Kao の訛で Louis Kao（高類思）、Yang は Etienne Yang（楊德望）のことである。共にクリスト教信者にして北京にて西教に宣教師たる教育を受け、後パリに遊學した青年であつた。詳しくは H. Cordier, Chine en France au XVIIIe Siècle, Paris, 1910, p.185 et seq.; ———, Correspondents de Bertin, Toung Pao, 1917, Octobre-Décembre, p.295, note 2 等を見られ度い。又四一八頁上段の博羅尼都は西人は一般に Burhan ed-Din に充てゝゐるが「西域同文志」に從へば Boronitu である。滿洲文の或る碑文に之を Puranidun と謂つてゐるものもある。漢字では亦布那敦と記したものある】。

西師定功於己卯越七年丙戌
戰圖始成因詳詢軍營征戰形
勢以及結構丹青有需時日也
夫我將士出百死一生爲國宣力
賴以有成而使其泯滅無聞朕
豈忍爲哉是以紫光閣現勒有
功臣之像而此則各就血戰之地
繪其攻堅斫銳斬將搴旗實蹟
以旌厥勞而表厥勇爾時披露
布已有成詠者即書之幀間其
未經點筆者茲特補詠凡六事
禮不云乎聽鼓鼙之聲則思將
帥之臣撫是圖也有不棄答是之
感先是宵旰勤勞雖日神馳於
連營列陣之間此則目擊心存竟
如指揮諸將士於折衝禦侮之
際而痛定之懼予惟益欽
天眷於無窮凛月盈於有永遑敢
自詡坐謀伐赫濯而忘兢業哉

乾隆丙戌孟春月御題□□

平定伊犁受降

乘時命將定條枝

天佑人歸捷報馳無戰有

征安絕域壺漿簞食迎王

師 據副將軍阿睦爾撒納等奏稱大兵至伊犁部衆持羊酒迎犒者絡繹載道婦孺歡呼如出水火自出師以來無血刃遣鏃之勞救邊掃穴實古所未有

兩朝締搆敢云繼百世寧

經有所思好雨優霑土宇

拓敬心那爲慰心移

乙亥仲夏月中澣作

御筆□□

格登鄂拉斫營

阿玉錫者伊何人準噶爾屬司收臣其法獲罪應剉臂何不即斬犯厥尊徒步萬里來向化育之塞外

先朝恩事在雍正十一年薩拉爾來述其事云即波中勇絕倫持銃迎面未及發直進手奪無逡巡台見賜銀擢侍衛即命先驅清漠塵我師直入定伊犁達瓦齊聚近萬軍鼓其螳臂欲借一依山據淖爲營屯我兩將軍阿睦爾撒納薩拉爾重諮議以此衆戰玉石焚廟謨本欲安絕域撻伐毋乃逮皇仁健卒掄選二十二曰阿玉錫統其羣曰巴圖濟爾噶爾去年投誠封郡王納墨庫屬之章京也及察哈什副以進此人乃我師至伊犁新投誠之宰桑阿玉錫喜曰固當廿五人氣摩青旻銜枚夜襲覘賊向如萬祖父臨兒孫大聲策馬入敵壘厥角披靡相蹣奔降者六千五百騎阿玉錫手大纛搴達瓦齊携近千騎駁走喙息嗟難存荆軻孟賁一夫勇徒以藉甚入稱論神勇有如阿玉錫知方亦復知報恩今我作歌壯生色千秋以後斯人聞

乙亥季夏月上澣作御筆□□

鄂壘扎拉圖之戰

以誠馭詐致相輕（克勢將就縛乃以謫計緩阿逆寵阿哈薩）
（師將軍達爾黨阿不審虛）
（實按兵待獻遂失事會而）
（厄魯特宰桑之從征者既）
（心輕將帥所爲）
（因復同謀變亂）

謫變生戊巳駐營携少卒（時兆惠爲副將軍駐兵濟）
（爾哈朗所携不過偏師鎮）
（守伊犁等處而巳猝值叛）
（賊坌集因以少擊衆全軍）
（出而）

螳螂怒臂阻前程直何
畏曲中宵出一可當千衆
賊驚竟得全師逢接騎整
軍復入大功成

丙戌孟春月上澣補詠

御筆□□

和落霍澌之捷
今春我師勦逆夷首戰實和落霍
澌斬將搴旗早報捷酬勞頒賚已
有差即今生解俘囚至曰渥赭特
宰桑伊散秩大臣曾授職乃敢倡
亂如鴞鴟面詢彼所致敗故咋舌
惟歎天奪其彼衆猶有千餘騎覘
知我寡設計奇輜重遠行誘我遂
層々伏賊據險巇官軍四百始馳
至少騎示弱由之陲我進彼乃蠭
涌集銃礮如雨循環施我軍曾無
一傷者百靈擁護信有之衝突鋒入
矢齊發賊乃喪膽紛離披鹿埵隴
種各逃命大鞾張軍威殲彼
屍僵近四百負傷遁者數無訾是
誠天助額手慶奮勇要亦資人爲問
率軍者其人誰超勇親王家聲貽

將軍策布登札布爲超勇親王額駙策楞之子其兄成襄扎布襲封親王策布登扎布以奮勇着績爵封郡王亦賜號超勇

戊寅孟秋月作　御筆　○□

庫隴癸之戰

威孤有事射天狼三

穴窮追那許藏鋋險

賊人雖鼠竄擣虛士

氣正鷹揚五更直襲

屯營寨兩騎先收牧

馬羊兆惠於奪險攻賊時分遣侍衛札延保投誠厄魯特達什車楞二人收其牧羣以故賊不能脫以

少勝多張撻伐將軍

誠勇著旂常

丙戌孟春月補詠

御筆□□

烏什首長獻城降

執渠早是被恩榮先是達瓦齊自格登窮竄霍集斯伯克奉軍檄設計縛獻錄功褒賞畏逼遷隨

尙近情霍集斯伯克與小和卓木均係回目特爲所强懾因附和歡聲罪在可宥識順料伊將倒戟嘗與軍機大臣籌畫軍情曾諭及霍集斯伯克有擒獻達瓦齊一節我軍至其地彼或降順比大兵既近伊果縛欵小和卓木計圖擒縛因爲潛覺遁去遂率衆投欵軍門翦兇匪我願佳兵申明

昧難霜嚴令庫車之圍逆酋唾手就獲而失律者貽誤因命將軍兆惠往代就途次執失律之臣明示顯戮軍威大振疊

見牽羊肉袒迎

天佑人歸逮底績越因競

業凜虧盈

戊寅九秋作御筆○□

黑水圍解

喀喇烏蘇者唐言黑水同去年我軍薄狗穴强弩之末難稱雄築壘黑水待圍解詎人力也

天帲幪明瑞馳驛踰月到（毅勇承恩公明瑞孝賢皇后姪也命以副都統領兵行間爲前鋒召回京問以被圍情狀自葉爾奇木抵京路萬五千里疾馳踰月而至）面詢其故悚予衷蜂蟻張甄數無萬三千餘人守從容窖米濟軍軍氣壯奚肯麥麴山鞠蒭引水灌我我預備（逆猓導渠淹我營壘將軍兆惠等預開溝引之入河且轉資其用）反資衆飲用益豐銃不中人中營樹何至折骸薪材充著木銃鐵獲萬億（賊據高施銃鉛丸坌集營樹上我軍研木爲薪木中得鉛丸萬億卽取以擊賊斃賊無算）翻以擊賊賊計窮先是營內所穿井圍將解乃眥其中聞言爲之悵諸臣實鞠躬阮復爲之感

天眷信深崇敬讀

皇祖實錄語所載曾聞我

太宗時明四總兵來戰正値大霧彌雺々敵施火礮樹皆燬都統艾塔往視攻回

奏敵礮止傷樹我兵曾無傷矢弓匪今伊

昔蒙

帝佑覲揚

前烈勵予冲詎人力也

天帲幪大淸寰海欽皇風

己卯孟夏月上澣作　御筆　□□

ベリ開闢乾隆年間準回兩部平定得勝圖に就いて

呼爾滿大捷

我師萬里外馬力實難繼況深入賊巢主客勢誠異以被所圍固守鼓衆氣豈忍罪輕進惟獎勤王事上年十月十三日之役將軍兆惠直薄葉爾奇木城偪以四百餘人衝賊衆二萬餘又道遠馬乏猝有挫衂然深溝高壘悉力持守賊不敢犯其果銳沈毅有大過人者前輙以倖試爲嘗議將徒快懦夫首鼠之論何以勵將集事量以屢詔褒勉而趣諸軍剿日赴援再三督援師速進以接濟亦不待督責敵愾人同勵參贊先簡駐城銳卒益督諸路兵先至者星馳往營而將軍伯富德等所統滿洲索倫察哈爾及綠旗營屈兵取道霍集參贊公阿里哀以次解馬濟師一時軍聲士氣爲之益振指數居諸兵應臨波地爭勝在俯仰所關信非細中夜不安寢丞盼佳音至忽傳驛致章秉燭披衣視鑒戰五日夜斬將搴旗幟副將軍富德參贊及軍士同心成巨功殲賊數千騎德富報至月初六日統兵行至呼爾滿地稱本年正方遇賊騎五千麾衆爽擊轉戰五日四夜會參贊阿里哀督鮮馬西無至分翼斫陣賊衆創潰獲賊千餘人悉負傷敗竄而逆酋大和卓木脇中鎗傷賊衆舁之入城且潛回哈什哈爾矣己近將軍營通信卒遣四時將軍兆惠營中聞鎗礮聲知援兵已至乃厲兵邀戰將賊營焚燬數處且陣戮千餘人生擄五十餘人獲器械無藥算並遣索倫回兵各二人自軍門持牘相聞富德因附以入奏頑猶百計攻官軍一意備以此歷三月無恙皆寧謐先是舒赫德得兆惠撤取援兵劄云營中有餘糧可支二三月爲堅辟計自後猶會或用雲梯或用決水皆爲我兵先覺應平破三而營中繕備益嚴攻困守雖逾時而人皆有固志至是馳報自將軍下逮介士益整如故云相育來擊策一舉期功遂四月寤寐縈今朝始慶慰殷心念衆勞頗手威天賜佇待捷音馳國朝威遠被

己卯仲春月中澣作御筆□□

通古思魯克之戰

兩回酋昔困莎車得地
忘恩應剪除赤翟蜂屯
助白翟僑如狼顧庇榮
如渡河騎團五百耳背
郭賊將二萬餘守壘竟
同援兵返 時副將軍富德奉命領兵在道因命速進赴援而參贊大臣阿里哀所解巴里坤馬亦刻期至軍營遂大敗賊人兆惠等全軍以出然計我師堀壕守險已及百日矣 忠
誠廻憶益欷歔

丙戌孟春上澣補詠
御筆□□

九

125

ベリ明讃統達平回準回回部平定得勝圖に就いて

霍斯庫魯克之戰

回城既定進追兇雙

耳山前竄跡逢回語

霍斯庫魯克者華言雙耳也賊已六

千橫據嶺兵纔九百

仰攻峯遮廻安集延

逃路直躡拔達山

去蹤將卒同心奮敵

愾千秋國史勒勳

庸

丙戌孟春月補詠

御筆□□

阿爾楚爾之戰

霍斯庫魯遁餘魂
合旅窮追玉水源
蕃部勤王隨契苾
時布魯特皆隨軍爲嚮道旗軍勵
志定堅昆蚩尤所
恃依重險風后宛
同握八門健銳營
兵精火器雪山倏
作陸渾原

丙戌孟春補詠
御筆□□

伊西洱庫爾淖爾之戰

三交三勝武貔雄（霍斯庫魯）

（克阿爾楚爾及此凡三戰皆以少勝衆）

黥鼠徒嗟五枝窮一綫

沿溪進魚貫千尋列

嶂突蠶叢遊魂釜底

雖潛脫馳檄天邊竟

定功蔵事追思臨事

愼持盈永以勵深衷

丙戌孟春月補詠

御筆□□

拔達山汗納欵
深入殲渠逃望風情
知三窟已途窮嘉茲
識早獻馘順笑彼悔
遲跋扈雄和衆永看
兩部定成功速在五
年中（西師之役始於乙亥春準噶爾汗達瓦齊擒獲回部各部款附即於是秋辦理就收服回部計蕆事距今未逾五年）
天恩此如昭優貺保
泰彌殷愼勅躬
己卯仲冬上澣作
御筆□□

平定回部獻俘

函首霍占來月竄傾

心素坦欵天閶理官

淑問寧須試驃騎窮

追實可臧西海永清

武保定午門三御典昭

詳從今更願無斯事

休養吾民共樂康

庚辰孟春月上澣

御筆□□

郊勞回部成功諸將士

京縣郊南親勞軍

圜壇陳

纛謝成勳出師本意聊嘗試西陲之役始以厄魯特諸台吉率衆款附清兵甚力我喀爾喀牧圉勢不可以錯處滋患無寧及其鋒而偏師嘗試特計因其地以撫之故禱旗命將之典概未舉行語具乙亥告成碑記茲準夷既平而回中諸部以次戡定實荷上蒼宗社鴻庥非敢謂先時逆覩及此也奏凱今朝備禮文釋甲弢才罷征伐論功行賞策忠勤膝前抱見詢經歷國朝舊制凡出征將領成功還者行抱膝跪見禮以示優異今即遵行一瞬五年戚以欣同心萬里那睽違畢竟歡言賦采薇勇將師來兼福將黻衣著得解戒衣漫稱偃武脩文日恐即嬉文恬武機飲至寧誇暢和樂持疊益勵愼幾微

庚辰仲春下澣作御筆○□

132

凱宴成功諸將士得詩八章

旧勞嘉勳藏禮旋昇平凱宴液池壖闢疆掃逆誠資衆助順成功總賴
天策績林々恩予厚詢勞一々命來前寧惟云不重生望祇覺廻思越悚然　日
麗風和春未深獎庸備禮有壬林試看偃伯靈臺上詎數流觴曲水淳命預綺筵
排伯克也陳夷樂奏任禁嘆聆獨枝無情者那覺西悲動乃心　圓幕高張榆柳
垂犒筵喜值禊修時策勳舍爵竟今日鬯武書常允不期雖擬浯溪泐崖頗我歌
靈夏出車詩紫光將畫凌烟像西師藏成大功自元臣及在事將軍參贊禁衛統領諸臣第其勳績懋賞者命工圖形紫光閣以崇獎勸穆棣同叨
乾貺貽　成功將士錦夜抱日月光輝軍氣鐲藉我虎臣典宿衛笑他杯酒解兵
權將軍兆恩副將軍富德既以酬庸管爵均命爲御前領侍衛大臣宋藝祖權衛駕馭凤所鄙敝戲及之　八旗子弟心如石萬禩國朝龍荷
天宣看瘡痍猶未愈三等侍衛綽克圖巴圖魯恩特騎勇過人臨陣不避鋒鏑今預宴賜酒時撫其額傷猶未痊復爲之惻然　能無一體恫瘝連
柳舒花放正良辰上日前期福履申三月三日爲上巳然是日始戊申故云　卸甲韔弓藉鳧藻回晴豐額
集魚鱗千秋難遇太平宴百戰歸來義勇身獨憶儲胥宣力者故大學士黃廷桂綜理軍儲調遣諸務備殊忠
勤宋及武成蓋爲先逝故前賜詩有奪我賢臣太劇不敢留看凱歌廻之句　凱廻未見惜斯人　敦瓜蒸栗允堪憐二萬何期
竟拓邊遠愧周王興六月遲過殷帝克三年依楊霏雪凡經幾立轍登孤壘陷堅
此日征夫眞邇止阜州春滿七條絃　拔達山人獻馘歸三軍飲至藹晴暉勞心
幸我舒宵肝公道遇伊論是兆紫綺朱提頗渥澤前歌後舞迓鴻禨歡來憶不同
來者軍興以來我大臣將弁等咸以藩忱自奮其間有遇阿逆之叛如將軍公班第參贊伯鄂容安遇噶爾藏多爾濟等之叛如寧夏將軍和起而追色楞之逃者如副都統唐喀祿誤聽沙拉斯嘛號斯之詐者如都統滿福至遇廻酋和卓木三叛如副都統阿敏道前鋒統領鄂實副都統三格侍衛特通額總兵岳天喜而率命在途猝遇亂賊如將軍伯納木札爾參贊侍郎三泰其巴圖魯侍衛中之奇徹布巴凌阿寧古禮富錫爾瑞輝爾圖等並能以死勤事棄節捐軀雖加恩優予旋邺而當功成飲至時廻念義烈炳然尤不勝雪涕云　勞爵手持淚暗揮　芳節延禧淑
氣清禊歌聲是凱歌聲元戎允合躬承袞勇挍均敎手賜觥藉衆力茲疆地戒勅
予心永奉天行從來悟得受招理虔鞏流謙慎捧盈

庚辰暮春月上澣作御筆□□

右圖十有六幀始於伊犁受降訖於回部獻俘凡我將士胼胝
斫陣鏖奮席卷之勢與夫賊衆披靡潰竄麋鹿駭之狀靡不
摹寫畢肖鴻猷顯鑠震耀耳目爲千古臚陳戰功者所未有幀
端各系以
御製詩成於奏凱錄功即事紀實者十追叙時地補圖補詠者六既
裝潢成冊
親製序文冠於冊首並
命臣等恭識其後伏惟西陲撻伐之役歲不越五周北庭以北西濛
以西二萬餘里咸隸版宇懲此武成大定胥荷我
皇上廟算精詳先幾制勝用以洪迓
鑾貺佑順協乎惟時在事諸臣敬禀
睿謨以效忠宣力克建厥勳
策銘酬庸賞延于世辟施炳焉當我師之再克捷也
叙豐功則有
告成太學之碑有勒銘伊犁格登葉爾羌伊西洱庫爾淖爾之碑
闡偉績則有
西師詩
開惑論而自乙亥軍興迄巳卯蕆事見諸
賡詠者凡二百二十餘篇成勒石
武成殿廡用誌始末至若五十功臣則繪像
紫光閣
題贊以龍興之又繪其次者五十人
勅臣等擬贊同弆而
閣壁左右則繪平定伊犁回部之圖所以昭旂常垂史牒者爲奕
乎其詳且備矣茲冊復因事綴圖或採之奏牘所陳或徵諸諮
詢所述凡夫行間之奮敵愾冒矢石著勞勩者悉寫其山川列
其事蹟傳其狀貌繼自今恭撫斯圖皆得按帙而指數之曰是
役也某實任之而先登則某之統分部褒勦則某々之力也是
準部之所以殄滅回部之所以蹙亡也及曉
郊勞錫宴諸圖則又曰是
聖主所以犒勞臣示渥賚慶武成也若夫
目擊心存如指揮於折衝禦侮之際與所任欽
天眷而凜月盈者則
序文又已舉其緊要而詔示永久焉臣等因溯出師以來軍書旁午
宵旰運籌臣等獲於前席咨對之餘親聆
方略咸仰
聖明指授萬里之外坐照麟遺茲圖所繪戰勝形勢固皆
密勿機宜所燭如燃犀料如聚米者也臣等管蠡微渺更無能頌揚
萬一云大學士公臣傅恒士臣伊繼善臣劉統勳協辦大學士
尚書公臣阿里袞尚書臣舒赫德臣于敏中恭跋□□

然るに之をヘルマンの附けた順序と說明とに對比すると少からぬ相違を發見する。卽ち

この北京で裝幀せられたもの丶		エルマンの順番の	
一は	8	に當り	一五
二〃	4	〃	6 〃
三〃	7	〃	一六
四〃	14	〃	16 に當る。
五〃	9	〃	
六〃	13	〃	
七〃	2	〃	
八〃	5	〃	
九〃	3	〃	
一〇〃	12	〃	
一一〃	15	〃	
一二〃	10	〃	
一三〃	11	〃	
一四〃	1	〃	

かくの如く兩者の順序が非常に違つてゐる。然し此8、4、7、……1、6、16をこの順に並べて見た時、その各々の解說が上段の相對する數字のそれと互に一致して同一の光景を表したものとせられてゐるならば問題はないが、(單に排列の順番を間違へたものとして)、實際は之に反し、彼れに於いては繪そのものゝ解釋が全く變つてゐて、同一の繪を雙方全く異つた場面に見てゐるのである。從つてその異つた解釋をその解釋なりに一系の時代順に並べた爲エルマンの施した番號は全く北京出來のものと順を異にしてしまふに至つたのである。例へば終りの三圖を採つて云へば一四は回首霍集占の首級が北京に到着し、帝が宮城の午門に出御して之を受くる所であるのに、エルマンに從へばこの圖はそれより約五年前、一七五五年にAmur Sana が熱河に至り乾隆帝に見

を内附を乞ふ所だとある。一五は回部より凱旋の軍を郊勞する所であるのにエルマンに據ると帝が兆惠富德等に準部征討將軍の號を與くる所だと云ひ、一六は（偶番號だけこれ一つ一致してゐるが）凱旋の諸將士に宴を賜ふ所であるのに彼はこの役に征服せられた西方の諸民族が款を納れ誠を誓ふ所だと見てゐる。今エルマンの解說の全文を左に示すことにする。（これを見られるに際しては隆乾帝御製の「準噶爾全部紀略」「西師」等で十分であるから稍詳しい準噶爾征討に關する記事をも參照せられ度い）。

Ire. Estampe. L'Emperur Kien-Long, reçoit à Gé-Ho, les hommages des Eleuths, et leur donna pour Roi Amour-Sana avec le rang de Tsing-Ouang ou Prince du premier ordre à double titre. Vers la fin de 1754.

IIe. Estampe. Pan-Ti envoyé par l'Empereur pour installer Amour-Sana et commandant 150 mille hommes des Troupes de l'Empire surprend à la faveur d'un brouillard, Ta-Oua-Tsi, rival d'

Amour-Sana, et fait prisonnieres mille familles sans perdre un seul des siens. Année 1755.

IIIe. Estampe. Sesond Combat entre Pan-Ti et Ta-Oua-Tsi sur les bords de la Riviere d'Ily où Ta-Oua-Tsi qui avoit attaqué l'Armée Imperiale avant que son pont fut achevé, est battu et fait prisonniers. Année 1755.

IVe. Estampe. Amour-Sana établi Roi des Eleuths par l'Empereur, dont il étoit vassal, se révolte et après avoir assassiné Pan-Ti, assiége la ville de Palikoun. Il est forcé de lever le Siège à l'arrivée des Troupes de l'Empire commandées par Tsereng et Yu-Pao il fuit chez les Hasachs. Année 1756.

Ve. Estampe. Tsereng et Yu-Pao ayant eu peu d'union entre-eux et leur successeur, Taltanga s'étant laissé trompé par les Hasachs, les Armées Imperiales sont très affoiblies et presque détruites par une suite de petits échecs, mais il s'élève une Guére Civile entre les Eleuths: quelques-uns de leur Chefs veulent monter par leur propres forces au rang que la fuite d'Amour-Sana

laisse vacant ; d'autres pour s'en emparer, affectent de réclamer la protection de l'Emperur. Le Tadji-Tavona, un de ces derniers, bat Kaldan-Torgui, le tue et envoye sa tête à Pékin comme celle d'un rebelle, au commencement de 1757.

VIe. Estampe. L'Empereur charge Tchao-Hoei avec le titre de grand Général et sous lui Fou-Té, de soumettre les Eleuths et tous leurs alliés et vassaux, et de prendre Amour-Sana, qui encouragé par le bruit de la Guerre Civile et par celui de la division et de l'affoiblissment des Armées Imperiales, étoit rentré avec ses Troupes dans le Pays des Eleuths pour reprendre possession de la Couronne. l'Empereur passe en revue l'Armée qu'il confie à ses deux Généraux.

VIIe. Estampe. Amour-Sana marchant avec sécurité à la tête des Troupes qu'il avoit, aménés du Pays des Hasacks et des Eleuths qui commençoit à se rallier à lui, et se croyant au moment d'être rétabli dans son Royaume, rencontre Tchao-Hoei à la tête de sa nouvelle Armée enyoyée par l'Empereur et il est mis en fuite. Année 1757.

VIIIe. Estampe. Fou-Té Lieutenant de Tchao-Hoei poursuit Amour-Sana et reçoit les hommages et les tributs de Ta-Ouan ou des Hasacks que les Russes nomment Kosaccia-Horda, et ceux des Pourouths, des Tourgouths et de quelques autres Tartares, formant en tout vingt Hordes qui, jusqu'alors n'avoint en rien dépendu de l'Empereur. Amour-Sana se sauva chez les Russes, il y mourut peu-après de la petite vérole ce qui mit fin à la mésintelligence que sa retraite avoit fait naître entre les deux Empires.

IXe. Estampe. Après la retraite d'Amour-Sana chez les Russes, l'Empereur donna aux Eleuths quatre Hans ou Khans ou Rois héréditaires de leur Nation, et vingt-un Ngan-Ki ou Seigneurs pris egalement dans leur Nation, mais amovibles à sa volonté. De touts ces Princes et Chefs de sa nomination le seul Han des Tourbeths lui fut fidele. Dés l'Année suivante 1758. celui des Tcholos et celui des Hountchés se réuolterent ouvertement.

" Chacktourmanhan, dit l'Empereur aans son
" Poëme, devoit se joindre aux deux premiers et
" commencer par surprendre le Lieutenant Général
" Yarachan et les Troupes qu'il comandoit dans
" son territoire, celui-ci, en ayant été averti prév-
" ient Chacktourmanhan, le surprend lui-même,
" au point du jour et livre les Chouotés à la fureur
" du Soldat en juillet 1758. Soit que Yarachan
" se soit porté à cette action sur des soupçons
" trop legers, ou qu'il ait déployé trop de cruauté
" il paroit qu'elle a déplu à l'Empereur qui l'a
" fait mourir quelques tems après.

X^e. Estampe. Bataille gagnée par Tchao-Hoei, ou Fou-Té, contre le Han des Hountchés et les vingt-un Ngan-Ki des autres Eleuths. Année 1758.

XIe. Estampe. Tchao-Hoei occupe les Troupes à des exercices et des jeux militaîres, avant que d'entreprendre l'Expédition de la petite Buckarie, à la fin de la Campagne de 1758.

XIIe. Estampe. Premier Combat entre l'Armée de l'Empire commandée par Tchao-Hoei, et Fou-Té et l'Armée des devx Hot-Chom, sur les frontières de la petite Buckarie. Les Troupes Impériales passant la Rivière malgré la résistance opiniâtre de l' Ennemi. Année 1759.

XIIIe. Estampe. Tcheo-Hoei reçoit dans son Camp sous les murs de Yerechim, les hommâge des habitants de la Ville et de la Province, et nommes des officiers pour l'Administration de cette partie de la petite Buckarie. Juilley 1759.

XIVe. Estampe. Bataille d'Altchour gagnée par Fou-Té contre les deux Hot-Chom. Aoust 1759.

XVe. Estampe. Combat de Ier Septembre 1759 dans la Montagne de Poulok-Kol prés les Lacs de Poulong-Kol et d'Isil-kol et delaville de Badakchan. Fou-Té commande les Troupes Impériales contre les deux Hot-Chom. Le Combat est vers la fin du jour. Le Grand Hot-Chom y périt, l'Armée Chinoise y fit un butin considérable c'est la fin de la Conquête de la petite Buckarie.

XVIe. Estampe. L'Empereur reçoit les hommages des Peuples vaincus des différentes Hordes des Eleuths, des Pourouths, des Faugouths, des

Tourgouths et des Mahométans de la petite Bucharie. Année 1760.

相對比する時は兩者の差がよく分る。然らばその何れが正しいかと云ふにこれは仔細に各〻の解說と畫面とを比べて見て御製詩の內容がしつくりとそれに對する畫の表すところに合ひ、畫に表はれてゐる事物がよく詩の中に讀みこまれてゐる點から見てこの方を正しいとしなければならない。エルマンの解說は一見した所では時代の順も一貫し、事柄の內容も事實であるし、殊に畫と甚しく矛盾する樣な說明を記してない爲に久しく人を欺いてゐたのであるが、精細に見て行くと到底その誤たるを免れない。例へば第一圖の如き、畫面の建築が北京の午門であるか熱河の離宮であるが、この兩所に就いて多少の知識ある者は一見してその正否を斷じ得られる。それは斷じて熱河ではない、北京である。さうして左方の跪坐せる者は明に首級の入つた袋を捧げてゐるではないか、決して單に叩頭百遍、只管に恭敬の意を表してゐるものでない。第一五圖に就いて云ふも、郊勞の何たるかを知る者は必ず之を郊勞の圖とする御製の解を採るであらう、將軍の號を授くる所など云ふのは未だ畫面を悉く說明し盡すものでない。第一圖を例に取るに、畫面には老幼男女が道途に酒を載せ樂を奏して入國の軍隊を迎へてゐる所を表はし、前景には羊の一群を伴へる土民の群れを描いてある。御製の詩には之を指して「壺漿簞食迎王師」とあり、註して副將軍 Amur Sana の奏によれば、淸兵の伊犁に入るやその部衆「持羊酒迎犒者絡繹載道、婦孺歡呼如出水火」と云つてある。之を上揭 VIII の說明の漠たるに比して何れを正しとすべきか、云ふまでもないことであらう。他は一々對比するの煩を省く。

かくの如くエルマンの解說は結果に於いて誤を世に傳へたものであるが、思ふにそれはエルマン（又

はその憑據）が始めから畫面を左様な光景の畫と誤解し、さう信じてかの説明を附したものではなからう。恐らくはこの役に關する大體の事實をいゝ加減に（單に大なる柔盾のない程度に）十六葉の圖版に割りあてゝ作つた推定だらうと思はれる。（もし信ずる所があつて作つた説明ならばもう少し畫面の眞の「解説」たる體を具へさうなものである）。然らばエルマンは何に基いてこの記載を試みたが、この戰役の事實を彼に傳へたのは何であるか、エルマンはかの解説をフランスの王家の藏本の各圖の下部に鈔記せられた解説に得たといふ。彼は之を寫したに過ぎないから直接の責任はない。然らばこの王家本の手記は何に據つたものであらうか。玆に臆斷乍ら少しく私の考へを述べ度い。元來、この原畫に附隨して開雕上の參考としてなり、或は單に形式上の附屬物としてなり、各圖の正しい説明書が附けられてあつたらうといふことは常識的にも推測しうるし、亦幾度となく實際に書いて與へられたらしい證徵がある。コルディエー氏が探したが見付からなかつたさうであるが、當時佛國の印度會社から書いて送られたさういふ Mémoire があつた。（同氏が前記解題12頁に引いた Bertin の部下 N-M. Chompré 氏の手記參照）。また前に述べた Ko, Yang 兩氏へ〻ルテンの送つた手翰に（一七六九年十二月十七日附、エルサイユ發）la relation exacte des Victoires de l' Empereur qui sont le sujet des 16 dessins. を受取つたと書いてゐるのも各〻の畫面と全然無關係な戰役の記事でもあるまい。（コ氏前掲、11頁）。かゝる次第であるからもし王家本の鈔記がこれらの正確なものに基いたものなら今吾等の知つた様な誤に陷る筈がない。察するにこれは何かかゝる正しく畫に附屬した、元來説明用に附けられたもの以外の戰記に基いたものではないだらうか。さういふ類のものに據つて推測的に十六枚の圖版の内容を判じ、あゝいふ漠

たる、正確な知識のない者には一見して互に相撞着する所がない程度の説明を拵へたものではなからうか。果して然らばその材料は何であつたらうか。私の見る所ではこれは恐らく P. Amiot の手になる Explication du Monument gravé sur la pierre en vers Chinois, composées par l'Empereur, pour constater à la postérité la conquête du Royaume des Eleuths faite par les Tartares Mant-chouxs, sous le regne de Kien-long, vers l'an 1757. とゝ一文であらうと思はれる。これはアミオ師が北京に於いて乾隆帝御製の「西師」の詩（「西域圖志」卷首二に載す）を佛譯し一七七二年十月四日ベルテンへ宛てた手翰と共にフランスへ送つたもので、Mémoires concernant l'Histoire, les Sciences, les Arts, les Moeurs, les Usages, &c. des Chinois: Par les Missionnaires de Pekin. Tome I, Paris, 1776. pp. 325-400. に收めてある。（西師の詩は準部平定のことだけしか記さず、回部征討のことは詠んでないので、アミオ自身もその缺漏を認め〔前掲書 P. 383, note (53)〕自ら得たる Kaśgur よりせる乾隆二十四年七月二十二日附兆惠の奏言を含む上諭を譯し、事の回部平定に關するものゝ補ひとしてゐる。〔同書 pp. 385-396 脚註欄〕。だからそれに基いたものがこの方面の戰爭に就いても知る所があるのは怪しむに足らない）。王家本の手記がなぜこれに據つたと思はれるかといふに、兩者の內容を比較して見て甚だしく似てゐる樣に思はれるからである。さうしてその書物になつて世に出た時代も（王家に關係のある人ならベルテン宛のアミオの手書に係る原譯文を見たかも知れないが）、エルマンがその再刻をなすに先ち、王家本にこの書に據つたと見る左樣な手記の存することを少しも妨げない。なほこの書の序文中、右の譯文を紹介した所に乾隆帝はこの文に記された戰役の光景を宣教師に繪かしめ、之をフラン

スに於いて名工に托して開雕せしむべきを命じたといふ意味の記事を掲げたのも、この譯文が王家本の手記の憑據となるに何かの緣がありはしないだらうか。[7] これらはすべて私一個の臆斷にすぎないが、姑く記して大方の垂示を俟つもとのである。

之を要するに以上縷述した所は甚だ繁雜を極めてゐるが、パリで出來た乾隆帝勅版の戰圖に就き、その由來や私の知る範圍の各種の異本に對する簡約な解題は凡そ右の通りである。茲に述べた岩崎本の如きものは、「天一閣書目」に依りて夙に一部學者の間にその確に存すべきことが暗示されてゐたと思はれるが、[2] 何分その記述が餘りに簡にしてそれだけを以てしては何れとも具體的なことを知ることが出來なかつた。もし岩崎本の將來せられたことによつて(現本と對比して)「天一閣書目」の記載が生きて來、またこれに據つて從來西洋に於いて一般に行はれてゐたエルマンの覆刻に基く各圖の解說が全く當を得ないといふことを明かにし得るならば(上來の私の考が甚しく正鵠を失はないものと假定して)、それは學界の一隅に多少の寄與をなしたものといふべく、私がこゝに蕪文を呻してこれが解題を試み敢て大方の教へを乞ふのも、亦その點に關連してのことに外ならない。[3] (八・九・二一)

註

(1) Mem. conc. l'Histoire,.....des Chinois, pp. X-XI もし直接この書に據らないとすればこの文を最も多く引いてある P. de Mailla, Histoire Générale..., Tome XI. 特に pp. 546-580 あたりに基いたと見ても差支ない。その發行は一七八〇年だからである。因に、この西師の詩の譯文並に註がこの兩役の記事に就いて西洋に於ける一種の Authority になつてゐることは注意すべく Howorth とか (History of the Mongols London, 1876, Pt. I, 特に p. 650 et seq.) Boulger とか (History of China, London, 1882 (1st Ed.) Vol. II, p. 463 et seq.) 或はそれ以下のものが主として之に據つてゐること、日本の末書が多く聖武記に據つてゐると同樣である。

(1) 「盛京典制備考」卷二將軍衙門檔庫藏書に見える「回疆一帶得勝

圖三十四篇」もやはりこの得勝圖であつて三十四といふのは圖、題詠各十六と序、跋各一とを合せた數であらうとも思はれるが、實はパリ原版のものゝ畫面上に乾隆帝の肉筆の御詠あるもの三十四枚を指したのであるといふことである。

(2) なほその上に、この本に依つて「回疆通志」や「西域圖志」(各種の異版ともに)其他に載する御製戰詩の誤字を大分を正すことが出來る。

附記

本稿忽卒の際に成り、遺漏も多く訂正すべき點も多いと思ふ。それらは發見するに從つて補ひ正して行く積りである。偏に大方の諒とせられんことを望む。既に校正の際迄に氣付いたものを取あへず左に錄しておく。

【三九八頁】註 (5) (6) 關連してこれらの解說の外にコルディエー氏はなほその著 Chine en France au XIIIe Siècle, Paris, 1910 の中に簡單にその解題を施してゐる。

【本圖の題名に就いて】「天一閣書目」に「平定回部得勝圖」とあるが、私はこの小篇の題の如く之に準の字を一字加へ度いと思ふ。それで內容を適當に云ひ表はせると思ふからである。

【四二一頁】跋の全文が「天一閣書目」に出てゐる樣に書したが仔細に對比すると節略を試みてある處が大分ある。且文字の誤や異形のものが目につく。

値上げ廣告

諸物價騰貴の爲め已むを得ず本誌の定價を奧附の通りに値上げ致しました。就いては定期購讀の方々には恐縮ながら不足高の御追拂ひを御願ひ致します。

彙　報

歐米新刊書目

BOOK NOTES.

I. BOOKS.

Annam, Précis d'histoire d'Annam à l'usage des écoles primaires. Par une réunion de professeurs. Saigon-Tandinh: Impr. de la Mission, 1919. In-8, ii-57 pp.

Banerji, B. N., Karuna: An Historical Romance relating to the Gupta Dynasty of Magadh. In Bengali language. Calcutta, 1918. 16mo. 393 pp.

Bang, W., Zur Kritik und Erklärung der Berliner Uigurischen Turfanfragmente. Berlin: Kgl. Preuss. Akad., 1915, 18 pp. 50 pfg.

——, Zur Geschichte der Gutturale im Osttürkischen. Berlin: Kgl. Preuss. Akad., 1915. 10 pp. 50 plg.

——, Vom Köktürkischen zum Osmanischen. Vorarbeiten zu einer vergleichenden Grammatik des Türkischen. I% Mitteilung. Ueber das türkische Interrogativpronomen. Berlin: G. Reimer, 1918. 62 pp. 4to. 3 mk.

Barber, C. A., Progress of the Sugarcane Industry in India during the years 1916 and 1917. Poona: Board of Agriculture, 1919.

Bosworth, C. E., Shoe and Leather Trade of China and Japan. (Special Agent Series 173). Washington, 1918. 37 pp.

Brown, A. J., The Mastery of the Far East; the Story of Korea's Transformation and Japan's Rise to Supremacy in the Orient. New York: Scribners, 1919. 8 vo. 9-671 pp.

Cable, A. M., The Fulfilment of a Dream of Pastor Hsi's: the Story of the Work in Hwochow. London: Morgan & S., 1917, 288 pp. 51-net.

Campos, J. J. A., History of the Portuguese in Bengal. With Maps and Illustrations. Calcutta, 1919.

Chapman, C. E., Catalogue of Materials in the Archivo General de Indias for the History of the Pacific Coast and the American South-West. Berkley: Univ. of California Press, 1919. 759 pp.

Christian College, Some Educational Problems in China, Canton: Christian College, 1918. 20 pp.

Castrillo, P. G., El comercio en el Extremo Oriente. Prólogo de Maximiliano Estébrnez. Madrid, 1918. En 4., xi-354 pp. 6 pts.

Chand, M. K., Moslem Sabhyatar Ithias: History of Muhammedan Civilization. Caluttam, 1917.

Crawford, O. C., Appeal of Mohammedanism to the Chinese Mind. (Pamphlet). 1918.

Darley, M., Cameos of a Chinese City. Church of England Zenana Missionary Society. 1917. 3/6 net.

Demachy, E., Les Etats-Unis en Extreme-Orient. Mont-